

鳥海イヌワシみらい館通信

Vol,23 2017年 夏号



鳥海イヌワシみらい館
マスコットキャラクター
「ワッシーくん」

バードウォッチングへの誘い②③「探訪！最上川河口鳥獣保護区」
突撃！鳥海イヌワシみらい館⑥ 酉年記念！自然写真家 斎藤政広さんに聞く！
蜂蜜の森から①「蜂蜜の森から」
『森のドリンクバー（2017年7月）』酒田市にて

探訪！最上川河口鳥獣保護区

鳥獣保護区という制度をご存知ですか？そこは鳥や獣の楽園。今回の特集では山形県酒田市にある国指定最上川河口鳥獣保護区を取り上げますが、鳥獣保護区は皆さんの住んでいる近くにもあるかもしれません。きっと新しい発見と出会いがあなたを待っているはずです！

●国指定最上川河口鳥獣保護区

- ▶ 環境省 鳥海南麓自然保護官事務所管轄
- ▶ 存続期間:平成27年11月1日～平成47年10月31日
- ▶ 指定区分:集団渡来地の保護区
- ▶ 総面積:1,537ha
- ▶ 哺乳類:16種
- ▶ 鳥類:51科250種

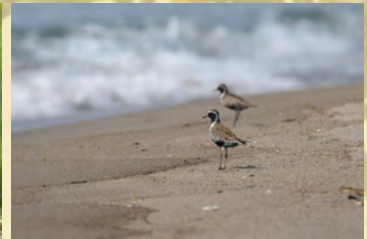


ヘラサギ 撮影：阿呆撮

年間を通して楽しめるのが
最上川河口鳥獣保護区の魅力です！



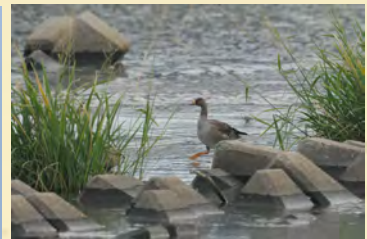
留鳥 (オオタカ、キジなど)



旅鳥 (シギ、チドリ類など)



夏鳥 (コアジサシなど)



冬鳥 (ハクチョウ、ガン類など)

撮影：長船裕紀

最上川河口鳥獣保護区が

選ばれています！

○モニタリングサイト1000



ガン・カモ類の調査地として全国に80か所のうちのひとつとして登録されています。

○日本の重要湿地500

共通の選定基準	
選定基準	内容
基準1	灌原・塩性湿地、河川・湖沼、干潟・砂浜・マングローブ湿地、蘆場、サンゴ礁等の生態系のうち、生物の生育・生息地として典型的または相当の規模の面積を有している場合
基準2	希少種、固有種等が生育・生息している場合
基準3	多様な生物相を有している場合(ただし、外來種を除く)
基準4	特定の種の個体群のうち、相当な割合の個体が生育・生息する場合
基準5	生物の生活史の中で不可欠な地域(採餌場、繁殖場等)である場合

(B) ガンカモ類
以下の項目がいずれかを満たすことを基本とする。
① レッドリスト種が産する。
② 大規模な産地(水田を含む)、あるいは中継地である。
③ 規模が小さくなくとも重要な越冬地である。
④ 渡りの過程での重要な中継地である。
⑤ 越冬地からの分散地である。
⑥ レッドリストまたは天然記念物の産地、重要な個体群の産地である。
なお、選定にあたっては、以下の点にも留意する。
1. 周辺の環境が開発の危険に晒している。

- ・都市景観100選 (1998年 飯森山地区)
- ・ジオサイト (庄内砂丘)
- ・カブトエビ生息地 (県指定天然記念物)



江戸時代の浮世絵にも日本の名所として描かれました。「六十余州名所図会 出羽 最上川・月山遠望」歌川広重(国立国会図書館)

残したい
“日本の音風景100選”

最上川河口の白鳥
山形県/酒田市
音風景の種類:鳥

最上川河口には毎年多くの白鳥が飛来する

毎年10月に飛来する白鳥の声は冬の訪れを感じさせ、春の北帰行までの間、朝夕の餌付けのとき、求愛や飛行のときなど、さまざまな鳴き声が聞かれる。市民が身近に白鳥とふれ合える場所であり、愛護活動も盛ん。

●よく聞ける時期/毎年10月上旬の第一陣の飛来から、北帰行の終わる4月上旬まで

●よく聞ける場所/最上川スワンパーク(最上川河口公園内出羽大橋近く)

●問い合わせ先/
酒田市環境衛生課環境保全係 ☎0234 (31) 0933

鳥獣保護区とは「鳥獣保護法」に基づいて国または都道府県によって指定された区域で、指定区域では狩猟をしてはいけません。つまり狩猟用具、および捕獲器具、罠などの使用が禁止されている区域です。特別保護地区では狩猟のほか、木竹の伐採、開発等も規制され、指定者の許可がなければそれらの行為を行うことはできません。

庄内の動物情報コーナー

例年に比べ少し肌寒い日が続いた4月～6月の鳥海イヌワシみらい館、7月に入って一気に気温が上昇し、急に夏が来た感じがあります。鳥たちも渡りの時期が少し遅いような印象ですね。山形でも大雨警戒警報が発令されるなど梅雨時もこれまでなかったようなことが起きていますね。ヒアリが見つかったりと悪いニュースが連日報道されています。環境変化等にお気づきになりましたらmoukin@raptor-c.comまで投稿ください。



2017/4/13「セイタカシギ」酒田市
皆同じ方向を向いて静止する鳥たち。今流行のマネキンチャレンジってやつですか！？
撮影：齋藤廉様



2017/4/21「メジロ」鶴岡市
桜の花にメジロ。こんな風景が厳しい冬を越す雪国の人々の心の支えになるのです。
撮影：高橋典子様



2017/4/21「ツクシガモ」酒田市
波打ち際を一羽散歩するツクシガモ。よたよたと歩くさまが伝わってきますね。
撮影：齋藤芽様



2017/4/23「ミサゴ」酒田市
今日の夕食をしっかりと捕まえて前後正しく巣に運ぶミサゴ。自分の体と同じくらいの大物ですね。撮影：小池侑多様



2017/5/5「アナグマ」酒田市
アナグマの本領発揮した姿。我々が普段目にする姿は穴から出てしまっている状態ですが、これが本当のアナグマです。(穴の中でなくともアナグマです)撮影：齋藤利孝様



2017/5/14「マミジロ」庄内町
一見カラス！いやクロツグミ？眉毛が白いマミジロです。
撮影：佐々木真一様



2017/5/23「アズマシロカネソウ」酒田市
日本海側の山林に咲く花。花は黄緑色と赤紫色の2色になって可憐な佇まいです。
撮影：齋藤利孝様



2017/6/18「ニホンカワトンボ」酒田市
全体的に白くて緋色の羽の、市街地では見ることのないトンボ。初めて見るとこんなトンボもいるのかと驚かされますよね。撮影：小池侑多様



2017/7/2「シロチドリ」酒田市
海岸を千鳥足であっちにこっちに忙しく動き回っている鳥がいます。よくみればこんなに可愛い鳥でした。足元の草が良い感じです。
撮影：下本緑様



2017/6/27「ジョウザンミドリシジミ」鶴岡市
ゼフィルスと呼ばれる仲間で、メタリックな羽をもつ美しいチョウ。朝早く見に行かないと、昼過ぎには樹上の高～い所に移動してしまいますので注意！早起きは三文の得。撮影：宮川道雄様



番外編2017/5/3「チョウゲンボウ」大江町
疾走するハヤブサ類！見よ！このフットワークの軽さ！飛んでよし！走ってよし！これぞ二刀流！
撮影：ナッシーくん



番外編2017/4/4「カムリワシ」沖縄県
当分は投稿されないだろうと考えていた鳥ですが、意外と早く掲載となりました。「メンソーレ！」と言っているな！きつ！絶滅危惧IA類の希少な猛禽類です。
撮影：ナッシーくん

突撃！鳥海イヌワシみらい館⑥



自然写真家 齋藤政広さんに聞く！

さいとう ましひろ

「鶴間池」撮影：齋藤政広

「モリアオガエル」
撮影：齋藤政広

梅雨が明けました。山形県内のその道のプロに教を乞う「突撃！鳥海イヌワシみらい館」のコーナー。今回は酉年記念第3弾ということで、自然写真家 齋藤政広さんにお話を伺ってきました。

～小さな虫を観察しながら、小宇宙的な世界の広がりを感じたり～

本間) 政広さんといえばブナ林が代名詞となっていますが、ブナ林を撮り始めて何年になりますか？

齋藤) 酒田で暮らし始める前に長野県の白馬村で8年ほど暮らしていました。暮らし始めた最初のころは高山の魅力に惹かれて、登山口である猿倉を起点に周囲のブナ林に目を奪われることもなく、素早く通過して高山へと遊んでいました。あるとき山麓に展開するブナ林の素晴らしさに気づくこととなります。白馬での出会いからみると40年ほどになります。

本) そのブナ林に魅せられたきっかけはどんなことだったのでしょうか？

齋藤) 一つは芽吹きころに展開する緑の階調の素晴らしさです。また白馬での時代に信濃毎日新聞の丸山祥司記者に出会い、その魅力を教えていただきました。1989年6月、酒田での暮らしの中でしたが白馬に行くことも多く、丸山祥司さんから写真集「しなの動植物記 III ブナ林」をいただきました。ぼくも表現してみたいと思いました。



鳥海山鶴間池 芽吹きころ：撮影 齋藤政広

本) 横浜出身の政広さんですが山形の魅力はなんでしょう？

齋藤) 自然の素材が豊かなところかな。鳥海山で言えば海に面していること。海岸線に照葉樹林を配して、雪が多いこと。その湿った雪が、独特な山岳景観を鳥海山にもたらしていること。ここが北限、南限といった生物ラインが多様に入り組んでいること。ギフチョウとヒメギフチョウの混生地があったり、ギフチョウの北限が鳥海山であったりと。

本) 過去にイヌワシも撮影されていますが、どのような経緯で

すか？

齋藤) ぼくが酒田で暮らし始めた翌年の1985年の10月、鳥海山の八幡地区に「八幡スキー場建設計画」が持ち上がりました。鳥海山をフィールドに撮影を始めたころで、気になりつつも生活と撮影に追われて、スキー場建設反対の運動にはなかなか参加できませんでした。1990年ころから、その計画の愚かしさに何かできないかと撮影に入っていました。そのような最中、1993年10月全国的にも数を減らしている絶滅危惧種イヌワシの生息が確認できました。その後、イヌワシの調査が行われ、スキー場建設予定地付近がイヌワシの高頻度利用域であることが判明したにもかかわらず、山形県は1995年「県環境保全審議会」を開催し、「イヌワシの営巣地は計画地周辺にはなく、スキー場建設による影響はない」と結論付けた環境アセスメントの報告を鵜呑みにし、ゴーサインを出そうとしたのです。その審議会の答申から一ヶ月後、スキー場計画地に非常に近い岩場で、イヌワシの巣が発見され、加えてヒナまで確認されたことで状況は一転しました。こんな経緯からです。その後は猛禽類に興味を持ち今に至っています。



1993年11月16日 鳥海山南麓のイヌワシ 撮影：齋藤政広

本) 今までに環境の変化など感じることはありましたか？

齋藤) 昔、1990年ごろまではもっとウサギが多かったように思います。地滑りが起きてブナ林が根こそぎえぐられてしまうことも今ほど多くなかったように感じます。

本) 写真のタイトルやそれに添えられる言葉に意識されることはありますか？

齋藤) ぼくの写真のキャプション、タイトルよりもキャプションと呼ぶのは、一行サマリー(ぶら下がり文的な意味合いもあります。)言葉を意識します。被写体と語り、どうしているの、どこに行こうとしているの、何か聞いかけていたいことが意識の中にあります。それが写真のキャプションに生かされます。

本) 政広さんが最も好きな動植物とその理由をお聞かせください。

齋) やはり虫が好きです。虫に出会えるとホッとします。小さなハッチョウトンボの観察では小さな虫を観察しながら、小宇宙的な世界の広がりを感じたりします。そこにつながりを感じて、そこに自分もいるということに喜びを感じます。花で言うとヒナザクラなんか好きだな。か弱そうだけれどしなやかさがある、その適地に生きている花たちの暮らしに敬意を表しています。そのあたりを表現したい。



森の妖精ウスイロオナガシジミ
撮影：齋藤政広



イワウチワ
撮影：齋藤政広

本) 作品に込める思いをお聞かせいただけますか？

齋) 当たり前風景を当たり前表現できたらということとそのあたりが表現できているかなということ、作品に込めます。あとは出会いの喜びのようなことを。

本) 政広さんの写真には、普段野山を歩いても気づかない美しさや見逃している場面もあるのだなと感じさせられます。歩きながら被写体を探していますか？それともあらかじめ写真のイメージをして山に入りますか？

齋) これは両方ともあります。



～自然から離れる生き方でなく、離れた自然にいかにか回帰できるか～

本) 山岳ガイドもされていますが、政広さんが最も好きなシーズン、どこの山、場所がおすすめかお聞かせください。

齋) 5月中旬～6月上旬の芽吹きが時期が好きですね。少人数のガイドの時は、目的よりも出会いを大切にすることがあります。目的地まで行けないことがあります。その日その時、そのメンバーの技量も見極め、最良のプランを立てられれば良いと思います。

本) 登山シーズン入山される方に気を付けていただきたいことは？

齋) 山を全天候でそれぞれに楽しむ、そんなゆとりが欲しいと思います。ゆっくりと歩くことを勧めます。

本) これからの環境がどうあるべきでしょうか。

齋) これは難しい質問ですね。みなさんはどう考えているのか聞きたいです。地球としての視点が基本になるのだと思いますが、その多様で多彩な自然と密につながりあえる環境

が望ましいと思います。自然から離れる生き方でなく、離れた自然にいかにか回帰できるかが、このあたりが行政、国を動かしていく人々の基本的な理念にならないといけないと思います。人の暮らしはもっと質素に、いらぬものが多いと感じます。必要な人にはいいとして、電動歯ブラシ(自分の手を動かさなさい)トイレの便座ももっとシンプルのままでいいのではないでしょうか。電気を使う暮らしから使わない暮らしへの転換が必要です。原発は必要ありません。自然エネルギーが望ましいけれど、大規模でなく小規模多産がいいですね。あと生き物と触れ合う時間ももっとあったらよいと思います。昆虫採集とかももっとやれば良いのと思います。

本) 鳥海山に来られる方へ一言お願いします。

齋) 鳥海山という大きな自然、ゆっくりと歩きながら環境を見てそのスケールの多様性を味わってください。



齋藤政広さん愛用の光学機器の数々。デジタル機材やフィルムのほかあえて古い機材を使って撮影することで被写体の素顔を表情豊かに引き出す。



齋藤政広さんが見せてくれるブナの森は、心がほっとする写真ばかりです。そんな中にも新しい気付きや発見に、驚かされます。写真に添えられた言葉に政広さんの優しい人柄が感じられました。



齋藤政広(さいとう まさひろ)
1948年神奈川県横浜市生まれ
著書に『鳥海山・ブナの森の物語』、『鳥海山・花と生き物たちの森』、『鳥海山花図鑑』、『山と高原地図(鳥海山・月山)』等
2001年より写真集『ブナの声』シリーズを不定期に刊行中。小さなテーマから『いのちのつながり』を見つめている。

イベント開催報告

○猛禽類観察会「里山の猛禽サシバ」

4月15日(土)に、里山にやってくる猛禽類サシバの観察会を行いました。講師は希少種保護増殖等専門員の長船裕紀専門員と、イベントの協力として認定NPO法人ひらた里山の会から参加していただきました。

当日は残念ながら雨天となり、室内でのイベント運営となりました。

講師の長船専門員からは、サシバのやってくる環境や生態について説明を受けた後、ひらた里山の会の活動紹介をしていただきました。その後、雨がやんだため、当初の予定に戻り野外で里山の生き物調べをしました。長船専門員からドジョウの仲間や巻貝、水棲昆虫など里山の水田に暮らす生物たちを解説していただき、サシバのやってくる里山環境について理解を深めることができました。ひらた里山の会のみなさん、参加してくれた皆さんありがとうございました。



○観察会「最上川～西海岸探鳥会・身近に感じる鳥獣保護区」

6月3日(土)は、いつも冬に開催している国指定最上川河口鳥獣保護区の観察会を夏季にやってみようということで、「最上川～西海岸探鳥会・身近に感じる鳥獣保護区」と題して観察会を開催しました。講師は希少種保護増殖等専門員の長船裕紀専門員です。

当日は飯森山公園山頂で鳥獣保護区の範囲を大まかに確認した後、山形県の野鳥救護所で傷病鳥救護について学習しました。その後庄内海岸を北上中に雨に降られたため、室内講義に予定を変更しました。長船専門員からスライドを用いて鳥獣保護区の制度や、生息する動物たちについて解説しました。午後から天候が回復したこともあり、野鳥観察を再開しました。観察会を通じて鳥獣保護法の制度と野鳥の生息状況について解説しました。参加してくれた皆さんありがとうございました。

観察できた鳥:カワセミ、モズ、ハクセキレイ、チゴモズ、カルガモ、ヒヨドリ、カッコウ、ハシボソガラス、キジ、トビ、ツバメ、ホオジロ、ノスリ、オオヨシキリ、スズメ、カワラヒワ、シジュウカラ、アカゲラ、コゲラ、ウミネコ、アオサギ、ダイサギ、ウグイス、キジバト、キビタキ、ツツドリ、カケス、コムクドリ、クロツグミ、コチドリ、ヒバリ、ムクドリ、ハシブトガラス、計33種



○観察会「鳥海山昆虫ラボ！」

7月22日(土)は、昆虫採集と標本作りから鳥海山の環境を学ぶ観察会イベントを開催しました。講師は庄内昆虫同好会のメンバーと、昆虫写真家の高嶋清明さん、希少種保護増殖等専門員の長船裕紀専門員です。午前中は鳥海高原で昆虫採集をしました。2班に分かれて行動し、事前に仕掛けたトラップを回収しながらフィールドを歩きました。トラップでは子どもたちの大好きなクワガタを採集でき、またチョウやトンボも悪戦苦闘しながらなんとか虫取り網で捕まえていました。

鳥海イヌワシみらい館に戻ってからは、講師の高嶋清明さんによる昆虫の高精度スロー映像やマクロ映像などプロならではの映像とともにお話を聞きました。

午後からは採集してきた昆虫を使って標本づくりをしました。まずは名前調べをしてラベルを作成しました。チョウの展翅など繊細な作業に悪戦苦闘でしたが、初体験の方でも、見事な出来栄に驚かされました。長船専門員からはアカマダラハナムグリなど庄内の環境の「今」についてホットなお話をしていただきました。今回の命の授業が科学することへのきっかけとなり、将来に活かしてくれることを期待します。庄内昆虫同好会の皆さん、高嶋さん、参加してくれた皆さんありがとうございました。



○「ゴールデンウィーク体験イベント」

毎年恒例のゴールデンウィーク期間中の体験イベントとして、今年は「蜜ろうそく作り」と「お鷹ぼっぼの絵付け」の2つを体験できるように開催しました。期間中は県外のお客さんも多く、体験数はこれまでで最も多くの方が体験していただきました。お鷹ぼっぼの絵付けを通して猛禽類の体の特徴を知り、蜜ろうそく作りで生態系サービス(生態系が私たちの生活に与える恩恵)を体感していただきました。来場してくれた皆さんありがとうございました。



イベント情報コーナー

○夏休み特別企画展示 酉年記念「鳥の不思議展」

いろいろな鳥の剥製や骨格標本を見て、鳥類の体の不思議を観察しましょう。絶滅したはずの「あの鳥」にも会える！

期 日 平成29年7月8日(土)～9月3日(日)
時 間 9:00～16:30
場 所 鳥海イヌワシみらい館展示室
入館料 無料



○夏休み体験プログラム

期 日 平成29年8月20日(日)まで
時 間 9:00～16:30
場 所 鳥海イヌワシみらい館
参加費 お鷹ぼっぼの絵付け・・・500円
蜜ろうそく・・・400円
エコバッグづくり・・・200円
木のうちわに絵付け・・・300円
※週替わりで2プログラムずつ開催します。
開催日程はホームページでご確認ください。
当日直接会場へお越しください。※予約不要



○観察会「松森胤安の見た自然」～両羽博物図譜に見る庄内の昔～

庄内藩士松森胤安が書き残した、山形県指定文化財「両羽博物図譜」をテキストに自然観察会を開催します。午後からは専門家を交えたシンポジウムを開催し、両羽博物図譜の功績や当時の環境について学びます。

期 日 平成29年9月2日(土)
時 間 9:00～15:00 ※午後のシンポジウムは13:00より
場 所 観察会場: 飯森山公園 講演会場: 出羽遊心館
定 員 先着30名
参加費 一人300円(保険・資料代) ※シンポジウムのみ参加は無料
講 師 永幡嘉之氏(科学ジャーナリスト) 長船裕紀氏(希少種保護増殖等専門員)
松森昌保氏(松森家当主)
持ち物 双眼鏡、昼食、飲み物、おやつ、(服装は長袖・長ズボン・帽子)
募集期間 8月31日(木)午後5時まで



○猛禽類観察会「秋の渡りを見よう！」

期 日 平成29年9月23日(土)
時 間 9:00～14:00
場 所 秋田県にかほ市(鉾立)
定 員 先着20名
参加費 一人300円(保険・資料代)
持ち物 双眼鏡、昼食、飲み物、おやつ、(服装は長袖・長ズボン・帽子)
募集期間 9月1日～9月21日(木)午後5時まで



上記イベントについて

お申込み・お問合せ TEL 0234-64-4681 (鳥海イヌワシみらい館) E-mail: moukin@raptor-c.com



蜂蜜の森から 第1回「蜂蜜の森から」

山形県朝日町で蜜ろうそくの制作を通して自然のすばらしさを伝えている安藤竜二さんによるコラムの連載を開始します。蜂蜜の森を通して私たちが暮らす環境を見つめなおしてみませんか？

ミツバチの限定訪花性という習性をご存知でしょうか？花の豊富な季節、彼らは巣箱を飛び出してから最初に選んだ花だけを最後まで回り続けて蜜や花粉を集める性質を持っています。例えばリンゴの花を選んだ蜂は、決してタンポポの花は訪れないし、タンポポの花を選んだ蜂は、リンゴの花に見向きもしないので。ミツバチには何の得もない習性ですが、植物には必然的に着果率の高い実りがもたらされます。きっとそれは何万年も前から、ミツバチと植物に交わされた契約があるのでしょうか。そしてその契約は自然の生態系はもとより、私たちの食料生産にも多大な貢献をしています。農業により媒介昆虫の少なくなった畑には、ミツバチによる花粉交配は必要不可欠なのです。私達が食べている多くの果実や野菜はミツバチの働きがあればこそその恵みなのです。



蜜源樹「トチノキ」

さて、多くの蜜源樹を抱える広葉樹の森には、飛びぬけて蜜を豊富に出してくれる「トチノキ(栃)」という樹木があります。樹齢百年以上なら一日一斗の蜜を出すと云われています。喜ぶのはミツバチや養蜂家だけではなく、秋に実るどんぐり三個分ほどもある大きな実は、ヤマネズミ達を喜ばせます。驚くことに彼らはトチの実を土中に貯蔵しておき、サポニンやタンニンなどの毒素を分解させて冬場の大切な餌とするらしいのです。ネズミが増えればイタチやキツネなど、その上の動物を喜ばせます。トチの実は、私たち人間も近年までは食料や薬として利用していました。トチノキはまさに多くの命を育むマザーツリーだなと私は思います。

かく言う私もトチノキのハチミツ収穫時に一緒に収

穫されるミツバチの巣の蜜ろうを使ってのろうそく作りを生業とさせてもらっています。もちろん、季節ごとにいろいろな蜜を使ってミツバチは巣を作りますが、飛びぬけて収穫量が多いのはやはりトチノキの蜜ろうなのです。私もトチノキに育ててもらっています。

しかし、トチノキの多くが減ってしまった残念な歴史もあります。現在は止まっていますが、昭和30年代から平成にかけて進められた拡大造林事業により、ほかの広葉樹同様に多くのトチノキが伐採されてしまったのです。トチノキハチミツ収穫は、東北や中部・中国地方で行われています。当時はトチノキの蜜をあきらめて帰化植物のニセアカシヤに移行したり、花粉交配を主な仕事にする養蜂家が増えました。ハチミツの収穫量が減少したのは、もちろん残念なことです。昔ながらの手つかずの均整の取れた森が、わずかしか残っていない事実も強く胸を締め付けます。

若いころに強く感じたことがありました。それは、自然界のすべての生き物は、誰かに恵みをもらい誰かに恵みを返しているということ。「もらったら返す。」というごく当たり前のことが、もしかしたらこの世で生きるためのルールなのではないだろうか。ところが我々ヒト科の動物は、あらゆる自然から恵みを受けているのに相変わらず壊し、汚すことをことを続けています。もっと多くの人に自然や人と自然の関わりを知って欲しいなと願っています。知れば知るほど自然に対する愛情が生まれるからです。人間が自然に返せることは、まずその「根っこのついた愛情」だと思っています。(文・写真 安藤竜二)



安藤竜二
1964年生まれ。養蜂を学んだ後1988年に、日本ではじめての蜜ろうそく製造に着手。ハチ蜜の森キャンドル代表。日本エコミュージアム研究会理事。山形県養蜂協会監事。編著『朝日岳山麓養蜂の営み』(朝日町エコミュージアム研究会発行)



Illustrated by Masami Tsuno

©鳥海イヌワシみらい館

普及啓発担当

観察会イベント頑張ります！張り切っていきましょう！皆さんのご参加お待ちしております！（本）

事務局

夏休みに入り毎日賑わってます！この時期だけの趣向を凝らした企画展示、ぜひ見に来てください！（村）

希少種保護増殖等専門員

土日がイベントと調査でどどん埋まっていく！秋タカの渡りを見に行けるかが心配のタネ・・・（長）

編集後記&施設情報

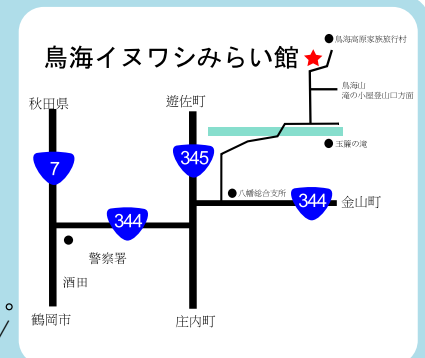
鳥海イヌワシみらい館 8月～9月の開館情報

開館時間・・・9:00～16:30
入館料・・・無料
休館日・・・9月館内メンテナンスのため休館日あり

臨時休館日はホームページにてお知らせします。
ホームページアドレス : <http://www.raptor-c.com/>

猛禽類保護センター

〒999-8207
山形県酒田市草津湯ノ台71-1
TEL 0234-64-4681 FAX 0234-64-4683
E-mail: moukin@raptor-c.com



鳥海イヌワシみらい館通信
Vol.23 夏号

発行: 猛禽類保護センター活用協議会
(事務局 鳥海イヌワシみらい館内)